

「オネエ所長の調査ファイル」 # 28

山崎浩治

1

「あたしの子どものころの夢はバレエダンサー。ほんとはチュチュを着たかったけど、学生時代に着てたのは柔道着。夢をあきらめなきゃいまごろ、白鳥の湖を踊っていたかも」

「何が白鳥の湖よ。盆踊りしか踊れないくせに」

「でもね、あたしは大人になって現実の中で白鳥の湖を踊ってるの」

「何よそれ？」

「あたしは運命のイタズラで男に生まれてしまった女。悪魔によって白鳥に変えられた女の子みたいでしょ？」

「悪魔みたいな顔したおっさんが言うな！」

「金沢プライベート・リサーチ」のオネエ所長、市山とその娘でツンデレ調査員の沙織が金沢市内のとある中学校周辺で聞き込み中だ。この日の市山は白いブラウスにフレアスカート、首にはスカーフを巻いて「ローマの休日」のオードリー・ヘプバーンを意識した女装をしている。

今回の依頼人は中学2年の娘・琴音(14歳)を持つ会社員・大輔(41歳)である。「娘がいじめで不登校になった。いじめの加害者と学校に謝罪させたいので、証拠をつかんでほしい」という依頼を受けての調査だった。

大輔夫妻が不登校になった琴音から「いじめられている」と打ち明けられたのは1カ月前。すぐに学校に相談し、対応してくれるよう頼んだが、担任教師は「クラスの生徒は誰もいじめていないと言っている。思い過ごしではないか」といじめの存在を認めようとせず、琴音はいまも不登校が続いている。

「学校の言い分は、証拠がないの一点張りなんですよ」

沙織が口をとがらせると、市山が答えた。

「いじめの証拠なんてあるわけないでしょうに。加害者は絶対にいじめたことを認めないし、周りの生徒はチクったら今度は自分がやられると思うから口をつぐむ。ましてやいまどきのLINEいじめなら、第三者がやりとりを見ることすらできないわ」

琴音がLINEいじめに気付いたのは去年秋の文化祭直後のことだ。クラスのLINEで「昨日の打ち上げは楽しかった」「盛り上がったよね」といったやりとりを見て、自分だけ打ち上げに呼ばれていなかったことを知った。彼女を外して別のLINEが作られ、そこでクラスの連絡事項が通知されていたのだった。そのころから琴音はLINE上だけでなく、教室でも無視されるようになり、完全に孤立した。

2

「無視や村八分といったいじめの証拠を押さえるのは難しいわ。証拠を引き出すには娘さんの友人やクラスメートの協力が不可欠よ。証言してくれそうな信頼できる友人はいないか、娘さんに聞いてくれたかしら」

「金沢プライベート・リサーチ」で市山が調査の途中経過を報告すると、大輔が言いよどんだ。自分の部屋に引きこもって、抜け殻のようになっている琴音は「もしその子が私に協力してくれたら、今度はその子がいじめられるかもしれない。だから、友達を巻き込みたくない」と語ったという。大輔の目はくぼみ、無精ひげに覆われた頬が黒ずんでいる。夜も眠らずに娘のことを心配しているのだろう。市山が続けた。

「担任の教師や学校に責任を認めさせ、いじめた生徒に謝罪させても問題は解決しない。娘さんが本当に望んでいることは何？ 大切なことは娘さんが元気に学校に行ける環境を作ることじゃない？」

その後、琴音は新学期を機に転校した。ネットを通して琴音の悪口やウワサが転校先に伝わってはまずいと考えた両親は同級生に転校先を教えることなく、家族ぐるみで金沢市外に引っ越したのである。その報告を聞いた沙織が不満そうに言った。

「結局、いじめたヤツはおとがめなしか。なんか釈然としないなあ」

「卑劣ないじめと真っ向から戦う必要なんてないわ。琴音ちゃんは『死にたい』とも言っていたようだし、そこまで追い詰められたら逃げ出すのが一番。ただね、転校には緊急避難的な意味もあるけれど、いじめ加害者に対する指導が伴わなければ単なる厄介払いでしかない。加害者は代替りの標的を作って、いじめを続けるだけ。それが心配ね」

その中学で「転校した琴音が自殺した。その幽霊から真夜中、電話がかかってくる」というウワサが流れ始めたのは、それからほどなくのことだった。

3

百花は小学校時代、いじめに遭ったことがある。クラスにボスの存在の女子がいて、その子の気分によって常に誰かがいじめられており、ある時、百花の番になった。別に原因やきっかけがあったわけではない。いじめられるのはただ単に「選ばれる」のだ。

それから靴や教科書を隠され、クラスの女子から仲間外れにされた。誰も知らん顔をして話しかけてこない。目が合うとそっぽを向く。そんな時、以前と同じように接してくれたのが保育所が同じで、そのころよく一緒に遊んでいた琴音だった。

お蔭で琴音もクラスの女子から無視されるようになったが、琴音は特に気にするそぶりもなく、二人でいつも登下校や休み時間、給食時間を過ごすうち、いつのまにかいじめの対象は別の子に移っていた。二人でいたら、いじめって意外と怖くないんだな。その時、百花は思ったものである。

琴音と疎遠になり始めたのは、中学に入学してからだ。クラスが分かれたということもあるけれど、成績がよく、部活でも活躍する琴音に対し、勉強もスポーツも苦手な百花は小学生のころのように「ことちゃん」と気安く声をかけるのがはばかれるようになったのだ。中2では同じクラスになったにもかかわらず、ほとんど口を利いたことはなかった。

琴音がいじめられるようになったのは、部活で新部長になった中2の夏ごろのことだ。琴音と部長の座を争った同級生が部長に選ばれなかった悔しさから「顧問の前でいい子ぶってる」と言

い出し、他の部員もそれに同調した。琴音にはまじめ過ぎるところがあって、それが部内で疎まれていたらしい。部活の練習中、琴音がミスをすると、部員たちが厳しく叱責するといった部活いじめは、いじめのリーダー格が同じクラスだったことから教室にも伝染していく。

クラスみんなはリーダー格の生徒を怖がって様子を窺うばかり。無視するだけでは飽き足りない子たちのいじめはLINEの陰口へとエスカレートして、琴音は保健室で過ごす時間が増え、やがて学校に来なくなり、そのまま家族とともに転校してしまった。担任の先生は「家庭の都合」と言ったが、クラスみんなはいじめが原因だと知っていた。

その日以来、百花はずっと後悔している。琴音が教室でぽつんとひとりぼっちでいた時、小学校の時、琴音がそうしてくれたように、どうして一緒にいてあげなかったのだろう。一緒にいれば、つらさは半分になる。でも、できなかった。出しゃばると、やられる。いじめに巻き込まれるのが怖くて見て見ぬふりをしてしまったのだ。

琴音が転校すると、みんなは何事もなかったように平気な顔で過ごしている。まるで最初から琴音が存在しなかったみたいに。百花にはそれが無性に悲しかった。

4

「琴音ちゃんは転校を機に人間関係をリセットしようとスマホを買い替え、LINEのIDを変えたんだけど、それが自殺説の原因だったよね」

中学周辺で聞き込み調査をした沙織が市山に報告している。ウワサを耳にした市山はすぐさま大輔に連絡、琴音が転校先の中学で元気に登校していることを確認した。沙織によると、ウワサには尾ひれがついて「公園で首吊りした」「ビルの屋上から飛び降りた」「列車に飛び込んだ」など、さまざまな憶測を呼んでいるという。

「真夜中の校門に立った琴音ちゃんの幽霊を塾帰りの生徒が見たってウワサもあったわ」

「中学生が真夜中に塾の帰りもないでしょうに」

「でも夜中、公衆電話がかかってくるというのは本当みたい。琴音ちゃんのいたクラスや部活の子にかかっている。電話に出ると、相手はただ黙っているんだって。その公衆電話は琴音ちゃんが自殺した公園にあるっていうオチまでついているのよ」

「中坊ってほんとうに怪談話が好きだわね」

沙織が怒りのにじんだ声で付け加えた。

「このウワサ、いじめの加害者たちが面白半分に流してるんじゃないかな。それなら捕まえてとっちめてやらないと」

「ちょっとウワサの真相を調べてみましょうか」

それから数日間、琴音が通っていた中学の校区をパトロールした市山と沙織はある夜、公衆電話ボックスの中にある百花を発見した。

「あたしたち、琴音ちゃんのお父さんから依頼を受けて調査している探偵なんだけど」

市山が声をかけると、百花の目から大粒の涙があふれ出した。市山が優しく続けた。

「ウワサの張本人はあなただったのね。よかったら事情を聞かせてくれない？」

「うち、ことちゃんをいじめた子たちに、ことちゃんをいじめたことを忘れてほしくなかったの。だから、みんなに電話をかけてたの」

近くのファミレスの席で百花がしゃくりあげながら白状した。匿名のツイッターで「琴音が自殺した」とつぶやいたのも、百花だという。

「あなたがやったことは決してほめられたことではないけれど、琴音ちゃんの転校以来、いじめはなくなったんでしょ？」

琴音が小さく、しかし、はっきりとうなずいた。

「琴音ちゃんをいじめた連中はさぞ震え上がったことでしょう。でも無言電話するのはもうやめなさい。あなたがやることは他にあるわよ」

市山の言葉に、百花がおずおずと口を開いた。

「ことちゃんのLINEのID知ってたら教えて下さい」

「言いたいことがあるなら、直接会って言いなさいよ。そうすればLINEのように未読スルーされることもないんだから」

翌日、百花が市山に教えられた場所に赴くと、通りの向こうから女子中学生が歩いてきた。琴音だった。髪が伸びて、少し大人びた顔になっている。意外そうな顔をして足を止めた琴音に、百花が駆け寄った。

「うち、ことちゃんがいじめられるのを見て何もしなかった。ごめんね、ことちゃん」

百花のか細い声がかすれて震えている。しばらく沈黙が続いた後、琴音がふわっと表情を和ませた。

「ことちゃんなんて久しぶりに呼ばれたよ。それを言いにもわざわざ来たの、ももちゃん？」

それぞれのスマホを取り出して親しげに話し始める2人の中学生を物陰に隠れた市山と沙織が見守っていた。市山が呆れたように言った。

「琴音ちゃん、あんなことがあってもやっぱり、スマホを手放せないのね」

「スマホがないことでいじめられるかもしれないからね。いまどきの子どもは大変よ」

「あたしの中学生時代、LINEがなかったことを感謝するわ」

「おっさんは携帯にアンテナ立ててた時代の人だっけ」

「あら失礼ね。あたしの時代にはそもそも携帯なんてなかったの！」

フリルワンピースで春めいた女装をする市山をしみじみと見た沙織が言った。

「それにしてもおっさん、今日はまた一段とおどろおどろしい女装だな。ここがアメリカならエクソシスト呼ばれるぞ。おっさんの写真、インスタに載せていいか」

「あのねサオリ、それも一種のいじめだからね」

「そんな姿で公道を歩けるくらいメンタル強いヤツがいじめに屈するかよ。今度いじめるヤツがいたらおっさん、夜中に女装していじめっ子んちに行きな。『いじめてるやつはいねえか』って」

「あたしは能登のアマメハギじゃありません！」